

## 吉備の古代史シリーズ 第5回

### 温羅伝説を考える（中）——成立過程とその起源 「神仏習合の中から誕生」

NPO 法人福岡歴史研究会副理事長 石合 六郎

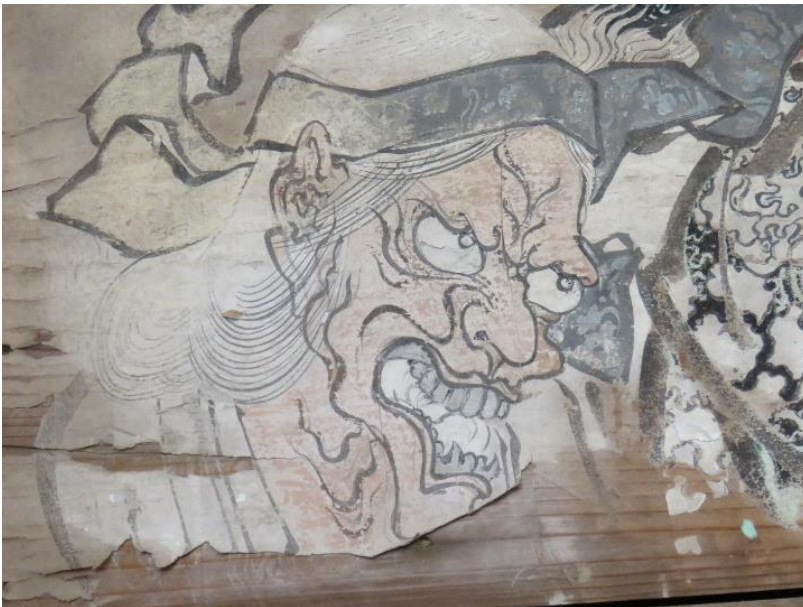
#### <はじめに>

「吉備津彦命にしのみちのいくさのきみ 西道將軍なと為る。吉備国は時に吉備冠者きびのくに有りて、命きびのかじやの軍を俟つと雖も、唯だ患ふ、各みなほろぶ涙る而已。冀のみとくは我が罪みことを免して君まの臣いへどと為さば、応たに逆徒うれを退くべし。君みなほろぶは現神ゆる、我おみまた使者之神まさと為りて賞さからふひと罰まを国民ほむることらしむることに加くにのみへんと云々。良御崎宮うしとらみさき是なり」(岡山県神社誌より)



小丸山の上に建つ良御崎神社

岡山市北区辛川市場の小丘の上に立つ良御崎神社の由緒書である。神となった温羅（和魂）の性格をよく伝えている。同神社は古墳の上とされていたが、岡山市教委の発掘でそれが否定され、中世の城塞の可能性や幕末の長州征伐時に土塁を築いた経緯が確認されている（小丘に建つ観光協会の説明看板）。吉備津神社などにも近く温羅伝説の一環として創建されたものと想像できる。日本遺産に指定され岡山市のパフレットにも紹介され、



温羅には弟おにがいた。名は王丹。眼光鋭く、あな恐ろしや！岡山市北区立田の御崎神社のご祭神の一柱が王丹だ。同神社の拜殿に飾られている絵馬

ぼれるのか（成立時期）を検討してみる。

「温羅の胸が埋まっている場所」  
との伝説がある。

このように吉備地方には村単位で御崎神社、良神社、良御崎神社が多く存在し、人々の生活の中まで浸透していた。今回は温羅の物語がどのようなものかを見てきたが、今回は吉備世界の中でだれが書いたのか、朝鮮半島の伽耶国と吉備の賀陽一族は関係あるのか、どこまでこの物語はさかの

## <1> 創作したのは誰か

### ◎吉備津宮<sup>かんなぎ</sup>巫祝や新山寺の僧徒係わる

温羅の研究では吉備津神社神主家の出身で岡山大学教授を務められた藤井駿氏（故人）の業績が有名である。その概要によると「この伝承が室町期に成立した可能性があること、温羅伝承の中にある鳴釜神事が平安まで遡る可能性があることを指摘した上で、この鳴釜神事が『鬼神の説話と接合せられ、吉備津宮の巫祝<sup>かんなぎ</sup>や新山寺の僧徒などによって、陰陽道や密教の解釈が加えられ、次第に吉備津の縁起として成立して行ったものかとも考えられる節がある』とした。また上古に語り部によって伝承された地方神話が反映されている可能性も指摘する。」（古市秀治著「温羅伝承に関する若干の考察」 p8）



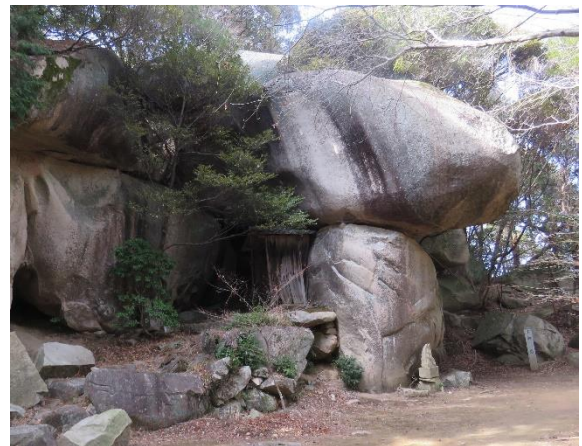
神仏習合時代に吉備津神社境内にあった三重塔の礎石が今も保存されている

### ◎藤井氏の研究を深化

前回も紹介した中山薫氏の「温羅伝説一史料を読み解く一」（2012 年刊）は同研究を深化けさせたともいえる存在だろう。

物語の成立過程についての部分を紹介してみる。

- ① いくつかの温羅伝説を検討すると新山寺（コラム 1 参照）の僧の手になるものと吉備津神社の神官の手になるものと大きく 2 つに分類できる。そして、温羅伝説



新山寺が廃れた後も山岳仏教の伝統を細々守る奥坂の岩屋寺地区にある鬼の差し上げ岩

- の最も古いものと推測できるものが「鬼城縁起」である。これは新山寺の僧の手になるもので、それ故に、鬼神の出身地をインドとし、鬼神の名称も温羅ではなく、剛伽夜叉と仏教的名称となっている。
- ② 温羅伝説を創作した新山寺の僧は、記紀にみえる吉備津彦命の吉備地方遠征と、この新山の鬼（鬼神）とを結びつけ、史実に存在しない吉備津彦と鬼（神）の戦闘を描き、鬼（鬼神）の死後の靈魂は、その恐ろしさの共通性から、吉備津神社に祭祀されている良御前に結びつけている。
- ③ 矢喰神社、鯉喰神社等の伝説が、温羅伝説創作に都合が良かったので、矢喰神社、鯉喰神社等をも、温羅伝説に取り込んだ。矢喰神社の矢の衝突の件は、壬申の乱に

おける吉備の地の騒乱、源平合戦における木曾義仲軍と妹尾兼康軍の戦闘、それらの時の伝説の可能性もある。二本の矢のアイデアではなく、矢が沢山飛び交い衝突し、矢喰神社辺に落ちた、という伝説である。

④ 鯉喰神社の鯉喰の事も、神社の古くからの神事に鯉喰神事（鯉を供える神事等）が存在して、鯉喰神社と呼ばれていたのであろう。鯉喰神社を温羅伝説に取り入れることによって、温羅伝説はその物語性をさらに豊かにした。

⑤ 温羅伝説は、十四世紀、最初、新山寺の僧によって創作されたものが基本となり、以後、吉備津神社の神官の手によって、各時代に、追加、修正、補足されてきたもの。（以上同書 p 112～116）

大方において藤井氏の見解をベースに置いており、多くの方々からの異論はないのではないかと思う。まさに神仏習合時代に最初の物語が紡がれたのだろう。

筆者も共有する部分は多く、徐々に物語性が増していく過程で、賀陽為徳の「備中国大吉備津宮略記」で、記紀や地元の伝承などをより多くの史的事象が組み入れられたというのが筆者の見解である。

**コラム 1** 新山寺は標高 406 m の新山にあった山上仏教遺跡の一つ。開基が弘法大師との伝承をもつ寺だが、現在は廃寺として地中深く埋もれている。平安時代には「備中新山」「備中別所」とも呼ばれ、東の比叡山と並び称されるほど著名な山岳仏教の一大聖地であった。

東大寺再建の任命を受けていた重源によって、備中別所に浄土堂一字が建立され、そこに丈六弥陀一体が安置されていた。都にも聞こえた大寺であった。

### 新山寺と山岳仏教 都にも名の聞こえた大寺

物語では人を茹でたとされた鬼の釜が保存されている。この釜は鉄釜で、口径 185 センチ、高さ 110 センチ、縁の厚さ 4.5 センチ、近くから江戸時代に掘り起こされたといわれる。形は口縁部が外へ張り出した特徴から鎌倉期の作をまねた作りと考えられる。総社市指定重要文化財。山口県防府市の阿弥陀寺に瓜二つの同様の釜がある。

## ◎民俗学による類型化

この温羅伝説の研究書を読むと、よく登場するのが大林太良氏の研究である。それは温羅伝承に含まれる物語の特色に注目し、“温羅の首を犬に喰わせる主題”や“鵜になって鯉を食べる変化比較の主題”は古代アジアで広く伝えられる伝説の主題に類似すること、あるいは阿曾の由来も大嘗祭の阿佐女などとの関連性に着目し、温羅伝承の主題の古さを指摘している。山陽新聞社刊の「古代吉備国論争<上>」に大林太良氏の講演「古代吉備の

伝説」が掲載されている。確かに広い視点で世界の神話と比較しており、興味深いものだ。

しかし、日本神話や素朴な地方の民話にどれだけ民俗学的類型化が有効かには疑念がある。むしろ事象（歴史的に起きたこと）をパターンに分けることは、本当に起こった歴史を見失う恐れさえある。奇異なことである。中山氏もその点には深く触れていない。

## <2> 物語はいつ成立したのか

### ◎室町時代には原型

藤井駿氏も指摘するように室町期（1336～1573 年）に最初の物語が誕生したのが主流となっている。中山氏は成立年代について緻密な論理展開をしている。前回と重複するが再掲する。

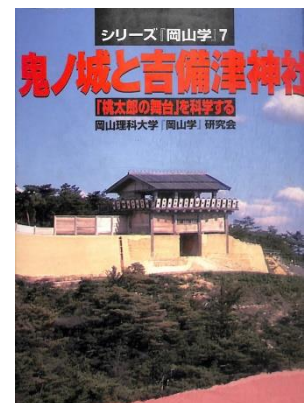
文献的として最も早い年代が記されているのが吉備津彦神社の左行事大守（同神社宮司家名）が書いた『鬼城縁起（写）』で、その巻末には延長元年（西暦 923）の書写がある。延長は平安中期の 10 世紀のことで古すぎる。文中に登場する『新山の釜』は、現在も同地区にある（コラム 1 参照）。ただ、この文献を平安時代とすることはできない。10 世紀前半に、実際、成立したかどうかは疑問である。同時に文末に書かれている『菩提寺』『本覚寺』のうち江戸末期の記録（備中誌）には『本覚寺』が見えないことを考えると古記録であることは確かだが、室町期に使われた庄園名『生石庄』『阿曾庄』もみられることなどから、『鬼城縁起は室町時代に成立した』と結論付けている。筆者もこの見解に同意、支持する立場で論理展開してきた。

### ◎異論を唱える見解も

吉備津彦命と温羅の関係について、「吉備津彦（桃太郎）はいたが温羅（鬼）はいなかった」というのが、冷静な議論の中では定着していると思っていたが、実はそうでもない議論がある。

#### (1) 賀陽氏と伽耶の関連説

代表的な議論では、賀陽氏の読み方「カヤ」が朝鮮半島の「伽耶」と同音であることから、カヤ氏こそ温羅では？ そうだとするなら、異国（百済、新羅）の王子とされる「温羅」はそれに当てはまるという議論である。岡山理科大を昨年退職された志野敏夫氏が掲げる仮説だ。同大学のシリーズ『岡山学』7 に「鬼ノ城“城主”温羅と吉備津彦」と題する論文がある。その要旨を箇条書きで書き出してみた。



志野氏の「鬼ノ城“城主”温羅と吉備津彦」が掲載される岡山学シリーズ7

- ① 温羅伝説にはいろんなところで「朝鮮」が出てくる。温羅自身が百済から飛んできて居城とした鬼ノ城は朝鮮式山城である。温羅という名前も「新羅」「加羅」「安羅」など朝鮮式だ。
- ② 朝鮮半島の三国時代のことを記した三国遺事では新羅国王・脱解は化けて鷹となり、大伽耶国王は化けて鷲となった。そのあと脱解王は雀となり、大伽耶国王はハヤブサとなるなど、温羅と命らの変身譚と極めて似ている。
- ③ 温羅の舞台となった吉備津神社の宮司は賀陽氏で、何らかの関連があったのだろう。
- ④ 伽耶は鉄産地であり、阿曾の鋳物集団とも関連があり、温羅は製鉄技術を持った渡来人。
- ⑤ 上道臣・田狭は賀夜一族で吉備津彦命の後裔である下道臣や上道臣と同族を否定はできないが、田狭とのつながりで「カヤ」と日本人との混血渡来人こそが温羅ではないか？
- ⑥ 伽耶は鉄産地であり、阿曾の鋳物集団とも関連がある。温羅は新羅に滅ぼされた伽耶人で製鉄技術を持ち6世紀半ばに吉備に来た。その後、加夜国造となり下道臣、上道臣と並ぶ吉備の支配者になった。(同書 p 72~90 から)

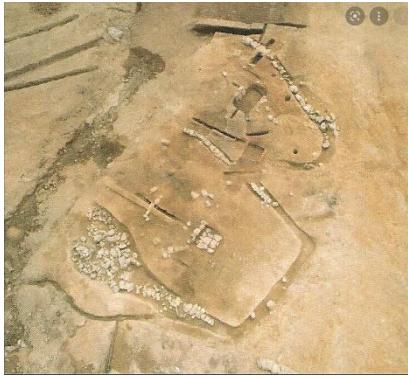
以上が志野敏夫氏の唱える温羅伝説の实在説だ。すなわち6世紀の吉備へ温羅が渡来して、それ以前から吉備を支配していた吉備津彦の後裔と並ぶ支配者になったという。

この議論では古事記と日本書紀の違いから、「吉備諸族発祥説話は創作の疑いが強く持たれる」(同書 p 83) と記紀をあっさり否定している。しかも、新たな伝承の掘り起こしがあるわけでもないのに状況の一致や言葉の一致を重視しており、空想の世界に入り込んでいないか。

また、インターネット上に「古代の吉備における加耶について－吉備・加耶交流史に関する覚書一」がある。(註1)

## (2) 製鉄遺跡を重視する説

総社市教委職員として、千引カナクロ遺跡発掘に携わった武田恭彰氏がとなえるのが、「キビの鉄を求めて来た吉備津彦(大和朝廷)」説である。6世紀後半には吉備は日本列島で最も多くの鉄を生産していた。これを押さえるために大和朝廷から派遣されたのが吉備津彦命であり、その鉄を生産していたのが総社の千引カナクロ谷の集団で、異国の王



千引カナクロ製鉄遺跡の発掘調査中の空中写真

子・温羅だというのが、その主張のようだ。なかなか大胆な説と思える。

それに関する書籍は見当たらないが、同氏講演のYouTube 記録などで理解したところだ。岡山、倉敷、総社、赤磐の4市は2018年度の日本遺産「桃太郎伝説の生まれたまち おかやま」の認定を受けたが、そのための準備中に「歴史資料から桃太郎伝説の起源を考える」と題し、武田氏が提言した時のものようだ。いい意味でも悪い意味でも指定内容に色濃く反映しているように思う。

武田氏はこの伝説は、架空の出来事ではなく、吉備の人たちの汗と涙の結晶で、歴史的事実が組み込まれていると強く主張する。

YouTube での印象に残った点をいくつか紹介してみる。

- ・私（武田氏）が発掘に携わった鬼ノ城の下にある千引カナクロ谷の製鉄遺跡には、鉄滓が残っており雨の時には血吸川は赤く濁る。地名にもなっている。
- ・倉敷市の楯築遺跡と鬼ノ城、その中間の矢喰宮、それと吉備津神社の位置関係は黄金の三角形を構成している。
- ・平家物語に登場する妹尾兼康は、治水（12カ郷用水）などで地元貢献し、慕われた人物だが、木曾義仲に討たれ、首がさらされた。吉備津神社近くの鯉山小学校には今も首塚といわれるものがある。近年発掘されたが同伴する土器や、頭蓋骨の破損状況から本物と確認されている。首塚の場所は吉備津神社の境内といってもよい場所であり、怨霊となった兼康の首、すなわち温羅の首といえ、この首がお釜殿のお釜下に埋められた逸話そのものではないか。
- ・桃太郎伝説は吉備の濃厚で芳醇な歴史を反映する。吉備の人もこれを楽しみ。外に向け発信していくことでさらに観光客を呼べるチャンスになる。（註2）



鯉山小学校にある妹尾兼康の首塚（右）

### (3) 天日矛と結び付ける説

系譜学者の宝賀寿男氏は、古代氏族の研究シリーズ「吉備氏 桃太郎伝説を持つ地方大族」の中で、「崇神朝当時の吉備には温羅と呼ばれる海外からの渡来伝承をもつ鍛冶部族

がいたとの伝承が残る」(同書 p 31) とし、その鍛冶部族が吉備の<sup>ひぼこ</sup>日矛族、すなわち温羅であると主張しているようだ。その部分を紹介してみよう。

「温羅なる者の素性は、『百濟』の王子という伝承もある。これは論拠が弱いとはいえ、外来、韓地南部の伽耶・新羅あたりから渡来した製鉄・鍛冶部族が吉備の先住者であったことを否定するものではない。天日矛集団は一次ないし数次にわたり韓地から日本列島に渡来してきて、最終的には但馬の出石郡(兵庫県豊岡市出石町一帯)に落ち着く。吉備も古来、豊富な鉄産地であるから、天日矛集団はすくなくとも一時的に滞在し、一族・従者をその後も当地に遺したことが十分ありうる。当地の製鉄遺跡は全国的に見ても最古であって、温羅遺跡のある鬼城山から西南に約八キロの地には姫社神社がある。

秦の石畳神社の北側対岸には宍粟という総社市の大字がある。同じ地名が播磨の鉄産地にもあって、天日矛が播磨に行く前に吉備にいたのは確かであろう(吉備には、宍粟の西方近隣に美袋〔みなぎ。総社市北部で、播磨の美嚢郡に通じる〕という地名もある)。」という。(同書 p 39~43)

このほかにも吉備と播磨の共通地名や神社名(出石、秦、あるいは兵主神社どな)を挙げている。また、鬼城山山麓の日本最古の製鉄遺跡・千引カナクロ遺跡(総社市奥坂)や総社市の久代・板井砂奥製鉄遺跡(板井砂奥、古池奥、大ノ奥、藤原、沖田奥の五か所の製鉄遺跡群)が、当時の国内最大級の鉄産地を構成していたことを強調している。

たしかに総社市に秦地区はあり、秦地区内に<sup>ひめこそ</sup>姫社神社もある。全長 70 メートルの前方後方墳一丁グロ古墳が 10 数年前に発見されている。しかし、この地区には温羅の伝承はない。どこまで温羅と日矛が結びつくのか、興味深い説ではある。

### <3> 鬼ノ城は温羅の居城か？

#### ◎発見者が語る記録

鬼ノ城の存在は一時忘れられていたが、昭和 46 年偶然の山火事によって山の全貌が見え、山城を探していた研究者によって見つけられた。その研究者・高橋護元ノートルダム清心女子大学教授が、総社市での講演会(註 3)で当時の思い出とともに語っている。築造時期や城の目的にも貴重な示唆に富む記録なので紹介する。



鬼城山全景

「昭和 45 年ごろから、鬼ノ城を探しに歩き始めました。日本書紀の中に記述のある吉

備の大宰府の場所を探したいと思ったからであります。じゃあ吉備の大宰府を探すのもまず山城を探せばいいんじゃないかと思ったのです。最初に訪れたとき、現在復元された西門から先のところが山火事で焼けていましたので、ちょうど石垣を見つけることができました。このとき、これは古代の山城であると確信しました。当時、山城はまだあまり発見されていなかったもので、珍しかったです。

鬼ノ城の場所には、かつて2回城が築かれていました。全国的に山城が作られていったのは、663年に白村江の戦いで唐に敗れてからです。幅30メートル、長さ300メートルぐらいの土塁が奥坂にあります。この奥坂の土塁は、谷口を土塁で塞いで作っています。この場所に山城があったと考えられますが、規模はあまり大きくありません。5世紀に作られて、大宰府のような施設があったのではないかと考えます。

(私が)吉備の大宰について関心を持ったのは、672年壬申の乱についてです。壬申の乱が起こると、近江朝から吉備と筑紫に、兵力動員の要請がきました。吉備の国守 当摩

広島はその要請に応じず殺されてしまいます。筑紫も応じませんでした。(コラム2参照) そのころに、吉備に軍隊があったとすれば、ちょうど鬼ノ城築城の真っ最中だったのではないかと考えられます。陣地を作るのは軍隊です。(兵の派遣を断ったのは)山城を作っていたからにほかならなりません。

現在の鬼ノ城は7世紀の終わり、ちょうど壬申の乱の前後に築城されました。その200年程前5世紀の初めにも巨大な土塁が作られていました。そのために吉備大宰がおかれていたと考えていいのではないかと思います。」

高橋氏の講演によると、鬼ノ城が作られたのは、白村江の大敗後よりは、壬申の乱(672年)の真っ最中で、大海人皇子(のちの天武天皇)が乱を制

## コラム2

### 壬申の乱余話

大海皇子が壬申の乱を起こすとすぐに近江朝は吉備と大宰府へ出兵を要請する。書紀はその時のことを次のように記している。

「大友皇子は『筑紫大宰栗隈王<sup>ちくしのだざいくまのおおきみ</sup>と、吉備国守当摩公広嶋<sup>きびのくにもり</sup>の二人は、元から大皇弟についていた。どうかすると背くかも知れない。もし従わないような顔色を見せたらすぐ殺せ』といわれた。樟使主磐手は吉備国に行き官符(命令書)を渡す日、

#### 吉備が握っていた勝敗

言葉巧みに広嶋を欺いて、刀をはずさせておいた。磐手はそこで刀を抜いて殺した」。一方、筑紫大宰栗隈王への使い佐伯連男<sup>さえきのむらじのおとこ</sup>は「国の防衛が優先する」と応じず、男を追い返した。

歴史にもしくはないが吉備一国でも応じていれば、壬申の乱の勝敗はひっくり返っていた。大友皇子の度量の問題なのかも。だが、古代から吉備の力の大きさを示す逸話の一つだろう。

(宇治谷孟「全現代語訳日本書紀下」p240)

し天武朝になって完成したとみてよいようだ。



## ◎正式報告とも一致

鬼ノ城は全国の古代山城の中では、発掘調査が最も進んでいる。岡山県古代文化財センターの報告書「ここまで分かった鬼ノ城」(註 4)には鬼ノ城を築いた時期について次のように記している。

「築城時期を知る手がかりとして、出土した土器の年代を推定する方法があります。鬼ノ城で出土した飛鳥時代の土器は、7世紀第3四半期にさかのぼる可能性のある土器も若干含まれていますが、おおむね7世紀第4四半期を中心とするものでした。特に、土器溜まりでは7世紀末から8世紀初頭にかけての土器群が出土しており、鬼ノ城が利用された時期を反映しているといえます。このことから、鬼ノ城は7世紀第4四半期を中心とする時期に築城され完成したと考えることができます」(同報告書 p14)。

これは高橋氏が講演で述べていたのと合致する。つまり、「鬼ノ城は白村江の大敗(663年)から幾分遅れ工事をしていた。その時に壬申の乱(672年)が勃発し、大友皇子(弘文天皇)側から吉備に派兵要請があった。」との高橋氏の推測とかなり近いものである。これで鬼ノ城の建築時期が特定できたといえる。



## ◎“水城”も存在か

この山城以前については、高橋氏は、鬼ノ城の南山麓の谷の入り口をふさぐ形の土塁が確認されている。その奥に大宰府のような建物があったのではという。この建物などの調査はされていないので実態は不明。

岡山市教育委員会で発掘や埋蔵文化財行政にあたり、現在、古代吉備国を語る会の主催者である出宮尚徳氏は、若干違う見解を示している。「土塁は水城の可能性もあり、鬼ノ城には増築・増強工事の跡がある。吉備大宰はこの城内ではなく、土塁の南側に残っている条里制区画に役所があったと想定している」との説を立てている。

高橋氏の土塁の奥(中筋地区)の建物等と出宮氏が指摘する役所跡(西阿曾)は別物だろうが、鬼ノ城の関連施設の存在が解明されると、より古代山城のなぞ解明につながるだろう。

正式報告書でも「鬼ノ城は7世紀後半に軍事施設として築城され、8世紀には礎石建物群を中心とした備蓄施設に変化したと考えることができます、その後、平安時代には近くの新山寺・岩屋寺のような山岳寺院の施設が営まれていたことが分かりました。」(同報告書 p14) とあり、この見解が現在の最新知見とみてよいのだろう。

### コラム 3

## 石川王の伝承 備後と播磨には伝わる

<備 後>江戸時代の備後地方の歴史書「西備名区」には福山市芦田町の国司神社のこととして、いしかわのおうきみ石川王がこの地で亡くなられたという。「備後今昔 上」(村上正名著)から紹介する。

「伝云、此国司神社と申すは、昔、天武天皇の御宇、石川王と申す人、吉備太宰という官で、本州の国司として、備後の府にましまして、国民を憐み給い、しばしば恵みある政治を行はれ、有がたきことなると思ひて、いつまでも君、治めさせ給へかしと祈りけれども、限りある任をぞなげきける。然るに天皇の八年己丑の秋とや、府申の御館において薨じさせ給いしかば、国民父母に別れし思いより、猶深く歎ぎ悲しめども甲斐なく、せめてはと、府の東の片山里に祠を建て、国司の社と斉き祭りしとぞ」(同書 p61)。備後にも府(政務の館か)はあったのだろう。書記では吉備で薨じているのでそこは間違いだろう。

<播 磨>「播磨国風土記」には「石川王が総領だったときに都可の村を広山の里と改名した」と記す箇所がある。吉備大宰が播磨をも担当していたことがわかる。書紀には天武天皇 8 年(679 年)に吉備で死亡とあるが、詳しくはわからず、謎の多い人物だ。

## ◎石川王が初代城主か



5段築成の大谷1号墳(上)と出土した金銅装環頭大刀



きびのおおみこもち吉備大宰のポストは天武朝になって初めて作られたものだ。石川王が天武帝に気に入られたためともいわれる。天武天皇 8 年 3 月 9 日病死している。情報量の少ない石川王だが初代の城主ということになる。

同王の伝承は備後と播磨(コラム 3)にはあるのに吉備にはない。筆者はこの謎の手がかりが「大谷1号墳」(真庭市北房町)にあるのではないかと考えている。同古墳からは「金銅装環頭大刀」と「金銅製品」が盗掘から免れ遺っていた。陶棺(須恵器)と木棺の2つで、5段築造の方墳という高貴な匂いがする。1995年のシンポジウム

ではパネリストの全員が同王の奥津城との意見だった。(そのシンポジウムをまとめた「終末期古墳と大谷一号墳―被葬者は吉備大宰か―」による)

古墳のある同市北房町の郡神社には「大吉備津彦命が静養に来られ、この地でなくなり、同神社の裏の古墳に葬られている」という伝承がある。この吉備津彦命と

吉備大宰が混同された可能性もある。機会があれば同神社の伝承とともに紹介したいと思っている。

#### <4>やはり温羅はいなかった

温羅伝承について検討してきたが、藤井駿氏から始まる落ち着いた研究の方に軍配は上がるような展開になった。新説について、筆者なりの反論を述べてみる。

#### ◎奇をてらっていないか

志野敏夫氏の「カヤ氏は温羅」説は、吉備臣田狭が任那の国司を務めており、伽耶とのつながりからの発想のようだ。これは人々の関心をひく説である。筆者も非常に魅力を感じ日本の賀陽氏の音が朝鮮半島に渡ったという説は成り立つかと思い描いてみた。

しかし、好太王碑には神功皇后の事績と思われる「倭の来襲」が記されている。倭と朝鮮半島の交流時期を決める絶対年代で辛卯年は西暦 392 年である。この時すでに「任那加羅」と書かれている。神功皇后の時代であり、吉備が朝鮮半島に影響を及ぼすのは、まさにその時からで、すでに国名の「加羅」定まっていた。賀陽（加夜）は応神天皇の分封以降の名である。

志野氏が言っているのは田狭（吉備臣）以降に、日本人と伽耶人の間に生まれた混血者が来日し「カヤ」を名乗って、吉備氏一族になったというのだろうか。

志野氏自らも「下道臣や上道臣と同族を否定はできないが」と指摘する。賀陽氏は吉備津彦命の末裔一族で、本宗家と目されている。罪人の田狭臣の血を引いたものが地位を得ることは成り立たない（雄略朝期を過ぎると緩和か）。日本書紀にも新撰姓氏録にも賀陽氏は吉備氏の宗家で稚武彦命の裔と書かれており、また多くの古典文献を否定することになる。やはり奇をてらった説に属するのではないか。

#### ◎安易な結び付け 鉄と渡来人

武田氏の「キビの鉄を求めて来た吉備津彦（大和朝廷）」説は、ご自身が総社市の千引カナクロ谷遺跡（製鉄遺構）の発掘体験を基にしている。当時（6 世紀）国内最大の鉄を生産していた同遺跡の重要性に注目しているわけだが、6 世紀に大和朝廷が吉備を攻めてきた記録はない。5 世紀の雄略帝の時期に、“吉備の反乱”伝承が 2 つある。下道の前津屋が帝を呪いいろんな不敬な行為を行ったのを告げられ、確かに日本書紀には物部の兵士 30 人が来て、70 人を殺したという記録はある。次の田狭の事件の時、本人はすでに朝鮮

半島にいたし、吉備海部は大和へ向かっていて、途中で引き返したので攻め込まれたとの記録はない。6世紀のこのような大きな事件が記録されないはずはない。やはり架空の事件としか言いようがない。

岡山市など4市が申請し、日本遺産に登録された「桃太郎伝説の生まれたまち おかやま」のキャンペーンに武田氏の意見は色濃く反映している。ほぼ現実の歴史と受け止められるようなPR活動のように見える。観光政策なので大目に見てほしいとの思いだろう。だがうその歴史を教えるてはならない。歴史的事実とキャンペーンの夢物語とを混同させないでほしい。

## ◎日矛の記録はない

秦氏の祖とされる天日矛<sup>あめのひぼこ</sup>は確かに瀬戸内ルートで近江に入り、引き返す形で日本海に出て、兵庫県の出石にとどまったとの伝承を持つ。当時瀬戸内海は吉備でも海岸線は今より深く内陸部に入り込んでおり、総社あたりはルート上と言えなくもない。高梁川に接する姫社神社の創建は極めもてあいまいだ。秦氏の吉備移住時期も不明だ。日矛の関係は言い張るなら可能性はのこる。とはいえこの地区の秦一族の定着の伝承、さらには日矛の記録などは全くない。地名の一致と製鉄族だけで、出自を決めるわけにはいかない。

## ◎年代論を無視した歴史はない

3つの説について筆者は吉備津彦の時代と温羅の時代は違っていることを指摘しているのに対して、「いや、吉備津彦は4世紀かもしれないが違うかもしれない。温羅や鬼神、冠者、剛伽夜叉<sup>ごうきやしゃ</sup>は6世紀のことでその事実を取り入れのだから、本当の話だ」と切り返されるのだろうか。吉備津彦はやはり4世紀の人だ。時代の違うものを結び付けば創作以外の何物でもない。あとは4世紀に吉備津彦がいたのは「記紀の創作だ」（津田左右吉の刷り込み幻想）と伝家の宝刀抜く。古びた刀のようだ。切れ味の悪い結末となるか、不毛の議論に戻るしかあるまい。しかし、年代をあいまいにして歴史は成り立たない。

## <おわりに>

このように温羅といわれる賊は創作だろう。この賊の性格も色々と「賊」ではなく、悪い征服者（大和朝廷）の犠牲者とさえ語る研究者も多い。この問題は次回のおとぎ話・桃太郎ばなしの変転とともに見ていこうと思っている。近代の日本人の心の変遷ともつながっているのだろう。（了）

## <註一覧>

(1) 志野敏夫のインターネット上の論文 URL



(2) 武田恭彰氏の講演 (YouTube) の URL



(3) 第10回吉備路再発見講演会の URL



(4) 岡山県古代吉備文化財センター報告書  
「ここまで分かった鬼ノ城」の URL



著者プロフィール：石合 六郎 (いしあい・ろくろう)

昭和 20 年 4 月、岡山県倉敷市児島田の口に生まれる。児島高校を経て立教大学文学部史学科を昭和 44 年卒。同年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部などを経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平成 17 年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科大学に勤務、同 19 年退職する。



東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と知り合い、同研究会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツアーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研究会副理事長。現住所は岡山市中区。